

小池和男『聞きとりの作法』東洋経済新報社（2000年）

3月末、著者の研究成果に関する研究会にオンラインで参加する機会があった。いわゆる“小池理論”に関して、労働各分野の大御所である諸先生方による報告を拝聴することができ、学生時代の感覚を思い出しつつ、新鮮かつ貴重な経験をさせていただいた。

前置きはさておき、そもそも本書を読み返すきっかけとなったのは、労調協で2017～2018年にかけて取り組んだ「次代のユニオンリーダーの意識と実態に関するインタビュー調査」である（詳しくは『労働調査』2019年10月号）。当時、組合役員に聞きとり調査を実施するにあたって、準備すべきことは何か、どのようにしたらこの調査の目的、本質、果たすべき役割などを整理することができるのか、そういった思いをクリアさせるために参考になると思ったからだ。質的調査を行う際の“気づき”を本書は与えてくれる。

本書で言う“聞きとり”とは、「直接企業にでむき事柄をよく知る人の話をじっくり聞くこと」を指している。著者は、数量分析の有効性を指摘しつつも、「数量分析だけで説明できる現象は決して多くない。むしろぬけおちてしまう情報が案外に多い。」という点を強調する。

「Ⅰ 調査計画－聞きとりのまえに」では、著者の数多くの経験に基づき、話し手の時間への配慮、仮説の設定（まえもって聞くべき要点を考えておくこと）から、誰に聞くか、どこで聞くか、時間や回数、聞き手の人数（2人一組が最適）など、さらには依頼方法の事例に至るまで、聞きとり調査に向けた心構え、ハウツーなどが事細かに紹介されている。この点は、聞きとり調査を検討している、これから実施する方々には大いに参考になるだろう。

「Ⅱ 聞きとり」は、聞きとり調査の実践部分に該当しようか。聞き方といった点では、「相手の答えにのって聞いていく」ことが重要で、「すくなくとも相手の答えに即した質問を2、3は重ねないと」事態は追究できない、と著者は言う。また、相手の協力を得るには（当然ではあるが）周到な準備と的を射た質問が大事であること、話し手の話ばかりでなく、目につく情景や状況などあらゆるものをメモにとり、それらを含めた聞きとりノートを作成が重要であることも指摘する。

「Ⅲ 聞きとり調査の説明力」では、聞きとり調査でしかできないことがあること、聞きとり調査とアンケート調査の併用による効果、などが考察されている。後者の点について著者は、「まず聞きとり調査で主要な変数の見当をつけ、それを複数の種の多くの個体にアンケート調査で聞いて確かめる」といった順序を提起する。調査の目的や研究テーマ等によって、調査の取り組み方もさまざまであるが、労働組合による調査活動に関しては、アンケート調査を先に実施し、そのあとに聞きとり調査を実施するケースも少なくなく、量的調査による結果の裏づけ、背景を探ることが多いように思う。ただ、聞きとり調査を行った上でアンケートを実施する、という著者の主張を読みかえるなら、アンケート調査の成否は企画段階で決まると言われており、調査主体と事前にその目的や調査項目の選定、現場レベルでの実態把握（課題の設定や仮設の構築）などの議論を丁寧に行うことが不可欠である、ということを示しているともいえよう。

このコロナ禍でリアルでの打ち合わせや会議などの機会が減少し、オンラインでの画面越しに意見交換を行っても、その場の雰囲気、相手のちょっとした表情や感覚などは十分につかみ取ることができず、悩ましく感じることもある。その場にはいないとわからないことも、たくさんある。そのような中でも、自身のアンテナにより磨きをかけ、コロナ禍を乗り越えた際は、再び自身の足で労働組合を歩いて回り、組合員や組合役員の意識や考え方を丹念に観察し、記録し、伝えていきたいと思う。（小倉 義和）